

資料紹介「大山不動靈驗記」(第五卷第四十七話)について

* 須藤 格

はじめに

平成28(2016)年7月16日から8月28日に茅ヶ崎市・寒川町広域連携事業の一環で、大山道をテーマとした展示会を市文化資料館と寒川文書館で開催した。本稿は、展示会の開催に際し、「大山不動靈驗記」全15巻・15冊を所蔵する藤間家より第五巻を借用・展示させていただいたものを資料紹介するものである。

一 大山と大山信仰について

大山(伊勢原市)は、相模国の国見岳といわれ、丹沢の山塊は修験者の行場もあった。別名、雨降山ともいわれ、古くから雨乞いの霊山として知られていた。江戸時代に入り、授福防災の神である石尊大権現として信仰を集め、関東一円に大山信仰は流布し、各地で大山講を結成して大山への参詣が盛んになり、同時に代参者などの往来のため、大山道は繁盛した。茅ヶ崎からは5里(約19.5km)、歩いて4時間の道のりと言われていた。大山道を西に歩き、寒川の一之宮へ出て相模川の渡しを渡り四宮を経て豊田に出て、伊勢原から登った。

真言宗大山寺は大平勝宝7(755)年創建と伝えられており、農業を営む地域では雨乞いの神として信仰された。特に近世以降、町人を中心に6月28日の初山、7月14・17日の盆山(夏山)などの大山詣が盛んであった。茅ヶ崎では、農業を営んだ人々は雨乞いのために、漁業を生業とした人々は大漁祈願やそのお礼参りのために参詣した。また、節分やお盆にもお参りをした。

本市では、特に8月13・14日にかけて盆山といい、大山にお参りを行った。夕方から若者が連れ立って大山に向かって歩き、「ロッコンショウウジヨウ、ナーマイダーボー」と唱えながら夜通し登り、山頂で朝を迎え、お札をもらい、昼までには帰ってきた。また、7月25日・8月17日までの間、市内の各所に「六根清浄」などと書かれた「大山燈籠」が建てられたと伝えられている。

二 「大山不動靈驗記」について

「大山不動靈驗記」(大山寺本、全15巻・15冊)は、大山寺塔頭養智院元住職心藏^三が見聞したこと、御師等からの聞き取りをとりまとめたものである。寛政4(1792)年に、「書肆 御書房 出雲寺和泉 西村源六」^三板木を元として出版され、131の話で構成されている。出版の目的と捉えられることが奥付に次のように記されている。「此書印刻入銀施主一部之料金三百疋宛、為家門繁栄・息災延命・壽福延長・現當二世諸願成就也」大山に信仰心をもつ篤志家が各々の思いや祈願を込め、出版に賛同・協力したと考えられる。

「大山不動靈驗記」には、様々な地域の人々が遭遇した困難や危機を、大山不動明王への祈りで克服したといった具体的な話が多く掲載されている。どうすれば大山不動明王の靈験を招き、その出版目的に掲げていることを達成できるのかを知らしめることで、大山への信仰を広め深める役割を果たしたと考えられる。

三 「大山不動靈驗記」(第五卷第四十七話)について

「大山不動靈驗記」に掲載された神奈川県内に関係するの靈驗譚は66話に及び、全体の半分以上を占めている。最も多いのが、32話掲載されている大住郡(現伊勢原・平塚・秦野市域)である。他地域については、足柄下郡(10話)・高座郡(8話)・愛甲郡(6話)・足柄上郡(4話)となっており、県内の武蔵国(現横浜・川崎市域)に係る話は少ない。

茅ヶ崎市域に係る話が登場するのは、第五卷第四十七話である。内容としては、藤間伊左衛門^三が廻船4・5艘を持ち、相模川上流から送られてくる薪を江戸に運送していた際のことと記述されている。宝暦10(1760)年5月下旬に大風があり、奉公人4名が船を引き上げようとしたが沖に流され、3名は水死。残り1人は16歳の少年で、泳げないので船に残った。少年は大山不動に命乞いし、助かった。少年の両親は大山に向かい、感謝の気持ちを含めて祝詞を唱えた。その後、風雨は静まった、といったことが記載されている。この話を、読み下しとともに紹介する。

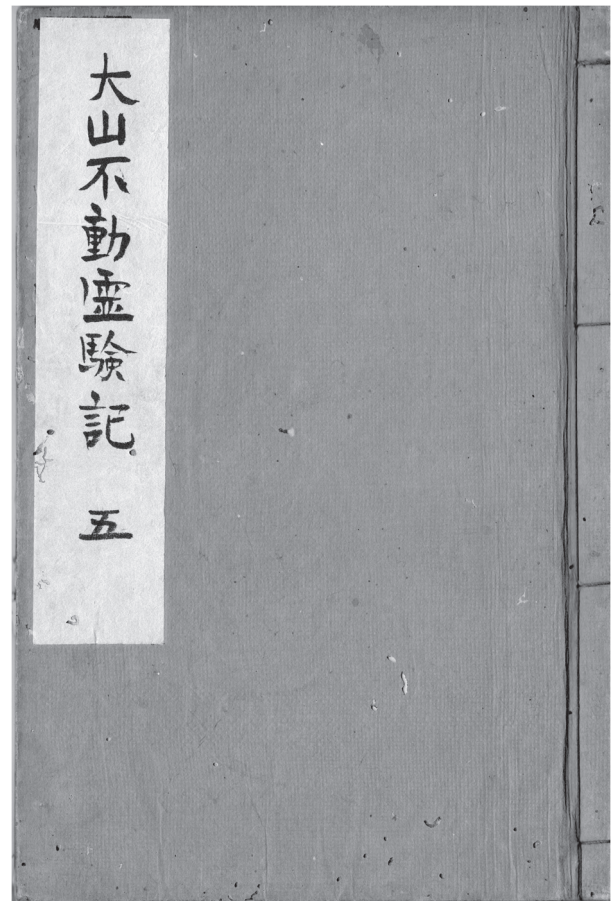


図1 「大山不動霊験記 五」表紙

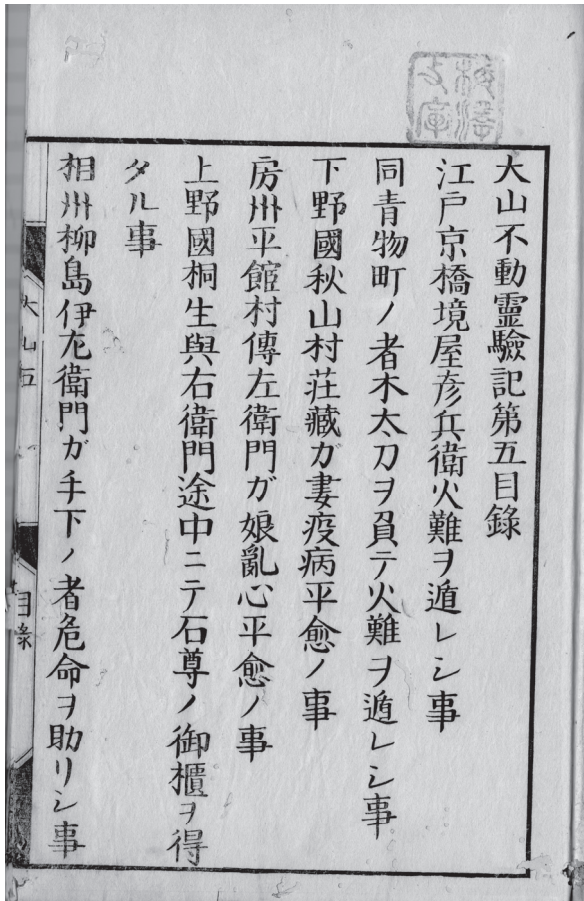


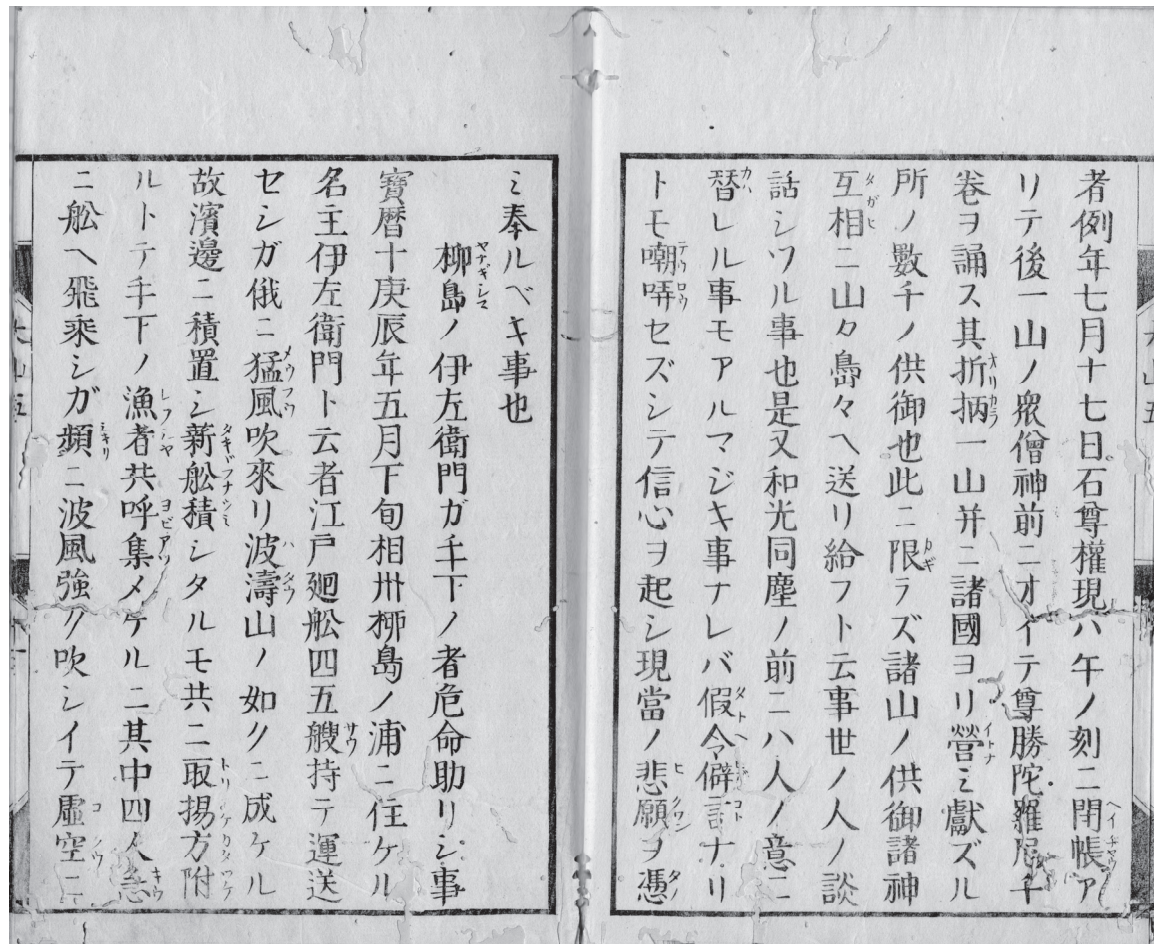
図2 「大山不動霊験記 五」目次

【読み下し】

大山不動霊験記第五目録
(中略)

相州柳島伊左衛門ガ手下ノ者危命ヲ助リシ事

図3 「大山不動靈驗記」(第五卷第四十七話①)



者例年七月十七日石尊權現六午ノ刻二開帳アリテ後一山ノ衆僧神前ニオイテ尊勝陀羅尼千卷ヲ誦ス其折柄一山并ニ諸國ヨリ營ミ獻ズル所ノ數千ノ供御也此ニ限ラズ諸山ノ供御諸神互相ニ山々島々ヘ送り給フト云事世ノ人ノ談話シフル事也是又和光同塵ノ前ニハ人ノ意ニ替レル事モアルマジキ事ナレバ假令僻言ナリトモ嘲哂セズシテ信心ヲ起シ現當ノ悲願ヲ憑

ミ奉ルベキ事也

柳島ノ伊左衛門ガ手下ノ者危命助リシ事

寶曆十庚辰年五月下旬相州柳島ノ浦ニ住ケル名主伊左衛門ト云者江戸廻船四五艘持テ運送セシガ俄ニ猛風吹來リ波濤山ノ如クニ成ケル故濱邊ニ積置シ薪船積シタルモ共ニ取揚方附ルトテ手下ノ漁者共呼集メケルニ其中四人急ニ船ヘ飛來シガ頻ニ波風強ク吹シイテ虚空ニ

柳島ノ伊左衛門ガ手下ノ者危命助リシ事

寶曆十庚辰年五月下旬相州柳島ノ浦ニ住ケル名主伊左衛門ト云者江戸廻船四五艘持テ運送セシガ俄ニ猛風吹來リ波濤山ノ如クニ成ケル故濱邊ニ積置シ薪船積シタルモ共ニ取揚方附ルトテ手下ノ漁者共呼集メケルニ其中四人急ニ船ヘ飛來シガ頻ニ波風強ク吹シイテ虚空ニ

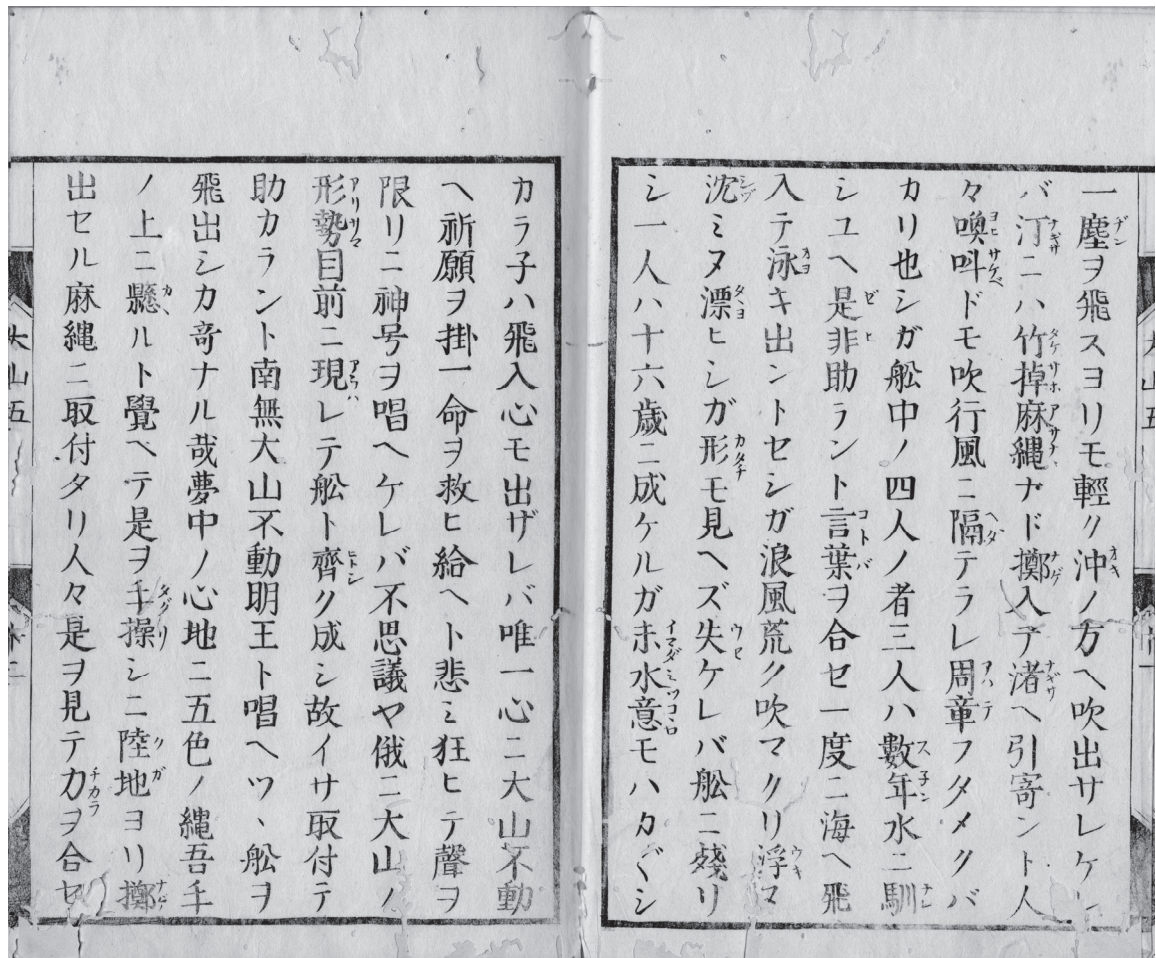
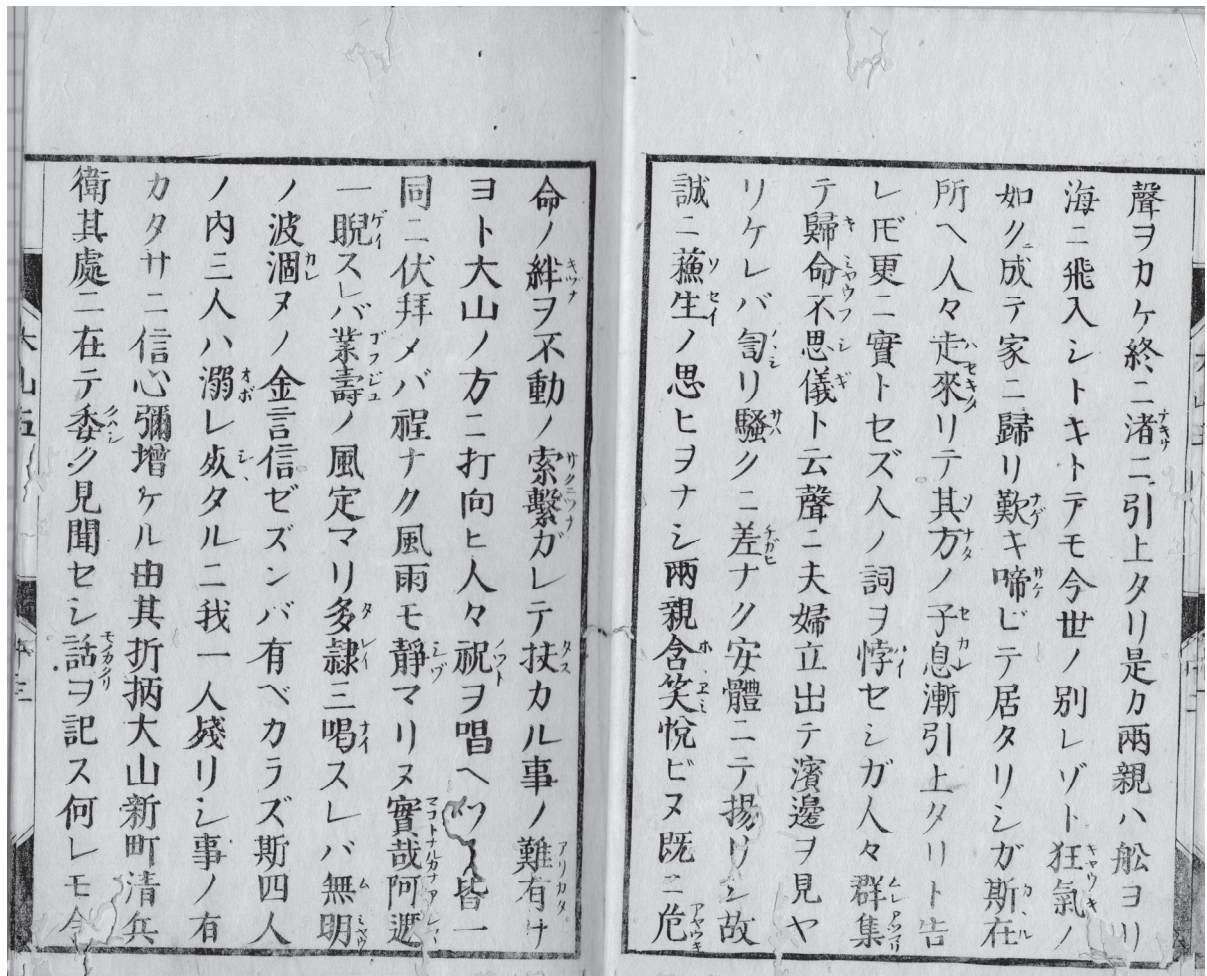


図4 「大山不動靈験記」(第五卷第四十七話②)

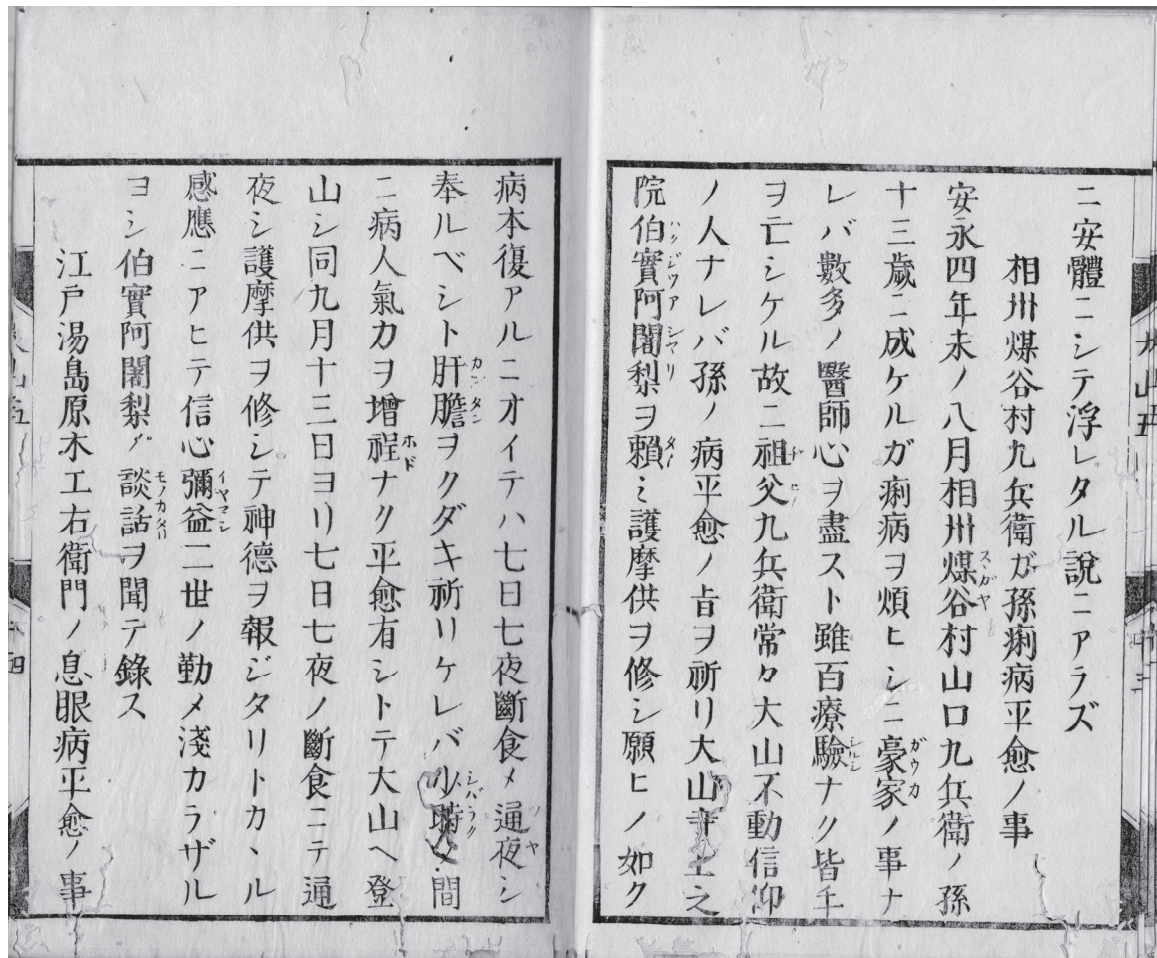
一塵ヲ飛ビスヨリモ輕ク沖ノ方ヘ吹出シサレケレバ
 バ汀ニハ竹棹麻繩ナド擲入テ渚ヘ引寄ント人
 ヲ喚叫ドモ吹行風ニ隔テラレ周章フタメクバ
 カリ也シガ船中ノ四人ノ者三人ハ數年水ニ馴
 シユヘ是非助ラント言葉ヲ合セ一度ニ海ヘ飛
 入テ泳キ出ントセンガ波風荒ク吹マクリ浮々
 沈ミヲ漂ヒシガ形モ見ヘズ失ケレバ船ニ殘リ
 シ一人ハ十六歳ニ成ケルガ未水意モハカバシ
 カラ子ハ飛入心モ出ザレバ唯一心ニ大山不動
 ヘ祈願ヲ掛一命ヲ救ヒ給ヘト悲ミ狂ヒテ聲ヲ
 限リニ神号ヲ唱ヘケレバ不思議ヤ俄ニ大山ノ
 形勢目前ニ現レテ船ト齊ク成シ故イサ取付テ
 助カラント南無大山不動明王ト唱ヘツ、船ヲ
 飛出シカ奇ナル哉夢中ノ心地ニ五色ノ繩吾手
 ノ上ニ懸ルト覺ヘテ是ヲ手繰シニ陸地ヨリ擲
 出セル麻繩ニ取付タリ人々是ヲ見テ力ヲ合セ

図5 「大山不動靈驗記」 (第五卷第四十七話③)



聲ヲカケ終ニ渚ニ引上タリ是カ兩親ハ船ヨリ
 海ニ飛入シトキトテモ今世ノ別レゾト狂氣ノ
 如ク成テ家ニ歸リ歎キ啼ビテ居タリシガ斯在
 所ヘ人々走來リテ其方ノ子息漸引上タリト告
 レ共更ニ實トセズ人ノ詞ヲ悖セシガ人々群集
 テ奇妙不思議ト云聲ニ夫婦立出テ濱邊ヲ見ヤ
 リケレバ旬リ騒クニ差ナク安體ニテ揚リシ故
 誠ニ蘇生ノ思ヒヲナシ兩親含笑悦ビヌ既ニ危
 命ノ絆ヲ不動ノ索繫ガレテ扶カル事ノ難有サ
 ヨト大山ノ方ニ打向ヒ人々祝ヲ唱ヘツ、皆一
 同ニ伏拜メバ程ナク風雨モ靜マリヌ實哉阿遮
 一睨スレバ業壽ノ風定マリ多隸三喝スレバ無明
 ノ波瀾ヌノ金言信ゼズンバ有ベカラズ斯四人
 ノ内三人ハ溺レ死タルニ我一人殘リシ事ノ有
 カタサニ信心彌増ケル由其折柄大山新町清兵
 衛其處ニ在テ委ク見聞セシ話ヲ記ス何レモ今

図6 「大山不動靈驗記」 (第五卷第四十七話④)



ニ安體ニシテ浮レタル説ニアラズ

さいごに

「大山不動靈驗記」自体は、当時の人々の信仰やくらしの有様を伝え表
象する非常に有用な資料であるが、本書に用いられる仏教用語や古語は難
解なものであり、また、その内容及び関連事項は広範に及ぶため、あくま
でも茅ヶ崎市域に関連する柳島の話そのままでの紹介となっ
た。なお「大山不動靈驗記」には柳島の話以外にも、茅ヶ崎に係るものは、
第四卷第三十九話に「相州萩曾根村正快房ガ祈禱ニ依テ童子蘇生ノ事」が、
第九卷第八十話に「相州茅ヶ崎村金左衛門ガ妻乱心不動尊ニ祈リテ平癒セ
シ事」⁴¹⁾が掲載されている。本稿において、紹介することはできなかった
ため、近い将来紹介したい。

また、茅ヶ崎市域には、大山や大山信仰に係る道標や歌碑、俗信や伝説
といった有形・無形の遺産が数多く存在する。これらについて、今後、よ
り詳細に調査し、総合的に研究することで、本市における大山と大山への
信仰をはじめ、当時のくらしの有様を現在に浮かび上がらせることを試行
していきたい。

少子高齢化の進展や経済構造の変革などの影響で地域社会が大きく変容
していく中、本書のようなかつての人々のくらしの記憶を伝えてくれる資
料は、博物資料や文化財という観点から重要であることは言うまでもなく、
まちづくりに資する重要な地域の遺産であると考ええる。なお、貴重な資料
を快くお貸しいただいた藤間家には心より感謝いたします。

⁴²⁾ 圭室文雄「『大山不動靈驗記』に見る大山信仰」（『郷土神奈川』18号、
神奈川文化資料館、1986年）、同「伊勢原市域における大山信仰―『大山不
動靈驗記』を中心に―」（『伊勢原の歴史』第2号、伊勢原市史編集委員
会編、1987）

⁴³⁾ 心蔵は実在した人物で、海老名市上郷の大山講中所蔵の銅製不動明王坐像
銘に「寛政八年（1796）丙辰六月吉日大山寺養智院隠居心蔵開眼口」とある。
厚木市飯山金剛寺大師堂の寛政年間建立の地藏尊5体の内の3体にも「
建立者養智院隠居心蔵」とある（川島、2008）

⁴⁴⁾ 出雲寺は、同じ上方出身で江戸に進出した須原屋茂兵衛と並ぶ老舗書物
問屋で、元禄11年（1698）に幕府の御用達町人（書物師、現東京都新宿区左
内町に居住）となり、幕府の書物方に属して、紅葉山文庫の運営に当たる

ほかに躍進した。和泉（文五郎元孝ともいう）の代以前から『武鑑』等の
板元を巡り競合し、最終的には須原屋に板権を譲った。藤實久美子「江戸
の武家名鑑―武鑑と出版競争―」（吉川弘文館 歴史文化ライブラリー257
、2008）

⁴⁵⁾ 川島敏郎「古記録からみた大山信仰の諸相」（『神奈川県立公文書館紀
要6号』、2008）

⁴⁶⁾ 同左

⁴⁷⁾ 同左

⁴⁸⁾ 「大山不動靈驗記」（第五卷第四十七話）に登場する「藤間伊左衛門」
については、議論されているところである。高野山の慈眼院の「登山帳」
に、宝暦6（1756）年に宿泊した記録がある（『伊勢原市史9』伊勢原市
教育委員会、1999）。同じく高野山の慈眼院の記録に「藤間善左衛門」が宝
暦7（1757）年に宿泊したことが記録されている（『寒川町史調査報告書
第6集』、1992）。また、藤間家所蔵の藤間家の家系が分かる「家脈弔祭記
」に「伊左衛門」の名は確認できない。これらのことから、「藤間伊左衛
門」は「藤間善左衛門」のことではないかと考えられる。

⁴⁹⁾ 「郷土茅ヶ崎 上巻」に読み下しのみが掲載されている（茅ヶ崎市教育
委員会、1973）

参考文献

- 「茅ヶ崎市史1」茅ヶ崎市、19801977
- 「茅ヶ崎市史3」茅ヶ崎市、19801977
- 「茅ヶ崎市史資料集 第三集 茅ヶ崎地誌集成」茅ヶ崎市、2000
- 「郷土茅ヶ崎 上巻」茅ヶ崎市教育委員会、1973
- 「資料館叢書5 柳島生活誌」茅ヶ崎市教育委員会、1979
- 「茅ヶ崎の伝説」茅ヶ崎市教育委員会、1981
- 川島敏郎「相州大山信仰の底流」山川出版社、2016
- 小島瓊禮「神奈川県語り物資料・相模大山縁起」（上）（下）「神奈川県
教育委員会、1970・1971
- 「日本民俗大辞典 上」吉川弘文館、198719871999
- 「相模大山街道」大山阿夫利神社編、198719871999
- 「大山の信仰と歴史」平塚市博物館、198719871999

*茅ヶ崎市教育委員会社会教育課文化資料館 担当主査・学芸員 須藤 格